

思春期・青年期における身近な同性同年輩関係

—関係イメージと同一性との関連より—

須 藤 春 佳

I 問題・目的

Erikson (1959) によると、青年期とは、児童期までに形成されてきた経験の斉一性、連続性が再度問題となり、新たに斉一性と連続性の感覚を求める時期であり、同一性形成が課題となる。特に青年期に形成する事が課題となる同一性を「自我同一性」と呼び、それは「内的な斉一性と連続性を維持する各個人の能力と、他者に対する自己の意味の斉一性、連続性に合致する経験から生まれた自信」(Erikson, 1959) としている。青年期の同一性形成においては、同類性を感じる同性同年輩の存在は、同一化の対象として重要な役割を果たすと考えられる。Blos (1962) は、思春期には、「同性の仲間との親密な理想化された友情の高まり」が起こり、このような対象選択は自我理想形成をもたらし、ここでの同一化は来たるべき青年期の同一性形成にとっても発達促進的であるという。Sullivan, H.S. (1953) は、児童期から青年期への移行期にあたる、前青年期における同性同年輩との親友関係をchumshipと名づけ、この関係性においてもたらされる安全保障感や、「自分は誰かに似ている」という感覚の発達促進的意義を説いた。同類性を感じる事のできる、同性同年輩間での同一化は、そこに自らを映し見る事で自らの準拠枠を得、心理的安定をもたらすと考えられる。身近な同性同年輩関係は、そこに自らを映し見、確認する事のできる「鏡映関係」にあるといえるが、一方でLacan, J (1949) が鏡像段階において示すように、自分を映し見る事のできる鏡像との同一化は、鏡像の備える「外在性」ゆえ、「わたしの精神的恒常性を象徴すると同時にそれがのちに自己疎外する」。すなわち、人間は同類性を感じる他者を求める事で、自らを成り立たせる事が可能になると同時に、それが外在する他者性を持った存在であるゆえ疎外される、このような両義性に目を向ける必要があるといえよう。

以上より、思春期以降、同類性を感じかつ他者性、異質性も感じうる存在としての身近な同性同年輩との間でどのような感情を抱いてきたか、相手との間でどのような関係性を持っていたかをみる事は、以後にその人がどのように同一性形成をしているかと関連するのではないかと考え、本研究では質問紙調査を行い両者の関連を検討する事とした。特に、同性同年輩間関係の様相を捉えるために、相手への感情や相手との関係においてどのような感覚を持っていたかを「同性関係イメージ」として捉えた。また、Marcia (1994) は、同一性研究の流れの中で、青年期の同一性を周囲の他者との関係性の観点から積極的に捉えようとし、同一性は「世界における個人の特定の存在のスタイルを意味する」と強調している。本研究ではMarciaの考え方に準拠し、「同一性」を、広く「世界に対する自己の関係のあり方、世界との関係の仕方がいかにあるか」と捉え、次の観点からみていく。i) 対自的側面：その人が対自的感覚の安定を得ているか、ii) 対人関

係的側面：周囲の人物との間でいかに自己を定位させているか、iii) 対状況的側面：状況の中(人物を含む)でいかに自己を定位していくか。

須藤(2003)の調査研究では、前青年期において特定の親しい友人に内面を打ち明けるchumshipの体験をした事が、自分に対する安心感や温かな感覚と関連すると示唆されたが、一方でchumshipを経験していない場合についての検討が十分でなかった。また、調査結果には性差がみられ、chumshipは元来男性をモデルに提唱されたため、女子における同性同士の関係性は質的に異なると考えられたが、具体的にどのように異なるのかを検討する課題が残された。また、従来の同性友人関係を扱った研究では、同性同年輩関係に内在する多面的感情や、関係性の動的な側面は捉えられていない。本研究では、身近な同性同年輩関係に内在する葛藤の側面を扱うとともに、支持的関係が得られない場合についての検討を行い、同性同年輩関係を多面的な角度から捉える事とする。以上のような問題意識から行った質問紙調査の結果より、本研究では、中学、高校、大学時代を通し、身近な同性との間でどのような体験をしてきたかにより対象者の類型化を行い、より個別像に近いものを描きだす事を目的とする。そして、特に1) 男女各々において、chumshipを経験した群とそうでない群では、同一性のあり方にどのような違いがあるのか、2) いかなる男女差がみられるのか、を明らかにする。

Ⅱ 方 法

1. 調査対象 近畿の国立大学(2大学)、私立大学(3大学)に通う大学生及び大学院生男女。男子179名(M=21.75歳, SD=2.31)、女子168名(M=20.96, SD=2.17)、計347名。

2. 調査用具 (1) 身近な同性同年輩関係の測定 ①同性関係イメージ尺度 身近な同性同年輩に対する関係イメージを測定するため、筆者が作成した。項目には、本研究の問題意識に基づき、身近な同性との間で同類性や自他の違いを感じたか、それをいかに受けとったかという観点から、様々な感情を盛りこんだ(共感的交流、一体感、思いやり、助け合いといったchumshipの特徴に加え、あこがれ、愛着、被影響性、希求性、相手への嫉妬、攻撃的な感情、競合関係、違いの認識、等)。対象者には、中学、高校、大学時代の最も身近な同性同世代の人を一人ずつ思い浮かべてもらった。そして「思い浮かべたそれぞれの身近な同性との関係で、あるいはその人に対して、各項目に示されている内容の感覚、感情をどの程度感じたか」を尋ねた。

(2) 「同一性」の測定 ①自我同一性尺度 本尺度は、Dignan(1965)によって自我同一性の感覚(Erikson, E.H. 1959)を測定する目的で作成された。自分で自分をどう感じているかという対自的感覚を測定するためのものであるという点で、本研究の目的に合致すると考えられたため、採用した。②一体性分離性尺度(Connected-Separated Self尺度) 自己を他者との関係性の中で定位させようとするConnected-Self, 他者とは分離したものとして定位させようとするSeparated-Selfの二側面から捉える事を目的とし、山本(1988)により作成された。本尺度は、周囲の対人関係の中で自己をいかに定位させているかの主体性を意識的に問うものとして適当であると判断し、用いた。③TAT図版 安香(1997)によると、TAT図版は現実状況のコピーであり、その状況処理する語り方や語りの内容は、被検者が直面する現実を処理していく力を反映している。従って、TATを見て物語を作る状況は、その人が世界をどう見るか、その人がある状

況に置かれた時、どのように世界を読み取るかが表出されると考えられる。本研究では、物語作成時に図版状況をどう構造化させるのかによって、同一性のあり方を見ることとした。具体的には、いかに図版との距離をとるか、描写的に描くのか、状況の中に入った形で描くのか、人物への気持ちの言及があるのかという視点で見る事とし、Harvard版の図版2と図版9 GFを用いた。図版2は、背後が農村風景であり、背後に田舎風の男女、手前に都会風の若い女性の3名が描かれている。手前の女性と背景とは対照的に捉えられる傾向にあり、図版自体のもつ対照性をどう処理するかにその人のあり方をみる事ができると考えられた。図版9 GFは、よく似た若い女性二人が描かれ、一方(右)が木の上から走っている他方(左)を見ている。二人の女性間に競合関係が見られやすい図版とされ、両者の関係設定を見る事で、同胞関係をどう読み取るかが窺われると考えられた。対象者には、「この絵の中の人は、今、何を感じ、どうしているのか、この絵の前にはどんな事があって、この絵の後にはどうなっていくのか、お話の筋をつけて書いてください。」と教示し、思い浮かんだ物語を記述してもらった。調査時期は2002年10月～11月であった。

Ⅲ 結果と考察

1. 質問紙尺度の分析 (1) 同性関係イメージ尺度の因子分析 中学、高校、大学各々について、項目分析を行った上で因子分析を行い、4因子を得た。項目の内容は、中学、高校、大学ではほぼ同じであった。プロマクス回転後の各項目の因子負荷量(高校)を例として表1に示す。因子Ⅰは安心感、一体感や連帯感を感じ、相手の立場に立てる、尊重される、自己開示できるといった内容からなり、chumshipの関係イメージと考え「chumship」因子とした。因子Ⅱは、同性に対する不安や反感、孤独感、相手に依存する等、身近な同性との間でのみたされなさや疎外感を感じる否定的な関係イメージと考え、「negative」因子とした。因子Ⅲは、同性へのあこがれ、目標とする、同じようになりたいといった、相手を自らの引き合いにする鏡映的な関係イメージと考え、「mirror」因子とした。因子Ⅳは、違いを感じる、それぞれに違った、といった、相手との違いについて言及する項目の集まりであり、「difference」因子とした。

(2) 自我同一性尺度の分析 項目分析を行った上で、主因子法による因子分析(プロマクス回転)を行い4因子を得た。第1因子は自分を独自性のある存在として感じられなさ、自分にまとまりを感じられなさを示す「独自性(-)」(例:いろんな自分があって、どれが本当の自分かわからないように思う)、第2因子は自分に対して安定を保てなさを示す「安定性(-)」(例:ささいな事でも自分は激しく揺り動かされる方だ)、第3因子は自分の進もうとする方向性がわかるという内容から「目的志向性」(例:自分が何を求め、何をしたいのか、はっきりしている)、第4因子は自分の長所も短所もわかった上で受け入れようとする「自己受容性(-)」(例:私は完全な人間ではないが、今の自分が好きだ)と、それぞれ命名した。「独自性(-)」 「安定性(-)」 「自己受容性(-)」因子は、逆転項目に正の因子負荷がかかった構造であったため、因子名の最後に-をつけた。これらは得点が高いほど、その傾向が低い事を意味する。

(3) 一体性分離性尺度の因子分析 項目分析を行った上、因子分析(重み付けなし最小二乗法/プロマクス回転)を行い4因子を得た。因子の命名は山本(1989)を参考に項目内容から、

須藤：思春期・青年期における身近な同性同年輩関係

表1 同性関係イメージ尺度（高校）因子分析表

項目		因子Ⅰ	因子Ⅱ	因子Ⅲ	因子Ⅳ	
因子Ⅰ chumship	96くつろいだ	0.836	-0.010	-0.169	0.129	
	59安心した	0.802	-0.079	-0.134	0.133	
	13気持ちに通じ合う	0.761	-0.035	-0.014	-0.086	
	95快い	0.759	-0.103	-0.054	0.167	
	72心の支えになる	0.739	0.152	0.035	-0.088	
	60楽しい	0.729	-0.137	-0.051	0.111	
	5親しみを感じる	0.728	-0.077	-0.028	-0.023	
	56好きな	0.722	0.006	0.037	0.127	
	99ありのままの	0.711	-0.141	-0.080	0.128	
	75心がはずむ	0.709	0.023	-0.053	0.016	
	74何でも話せる	0.695	-0.115	-0.017	-0.141	
	79自然な	0.679	-0.056	-0.153	0.111	
	100必要とする	0.674	0.081	0.070	-0.087	
	52弱いところも見せられる	0.665	0.082	-0.078	-0.023	
	38秘密を共有する	0.648	0.233	-0.051	-0.091	
	50信じられる	0.648	-0.149	0.103	-0.070	
	37意気投合した	0.639	-0.050	-0.017	-0.030	
	2協力し合える	0.611	-0.101	0.182	-0.109	
	27一体感を感じる	0.602	0.147	-0.017	-0.134	
44（相手から）必要とされる	0.593	0.143	-0.020	0.066		
42居て当たり前の	0.592	0.257	-0.200	-0.052		
因子Ⅱ negativ	71寂しさを感じる	0.030	0.668	0.096	0.131	
	29不安な	-0.015	0.663	-0.003	-0.021	
	23反感をもつ	-0.153	0.657	-0.036	0.127	
	84不快な	-0.245	0.625	-0.217	0.222	
	61孤独な	-0.020	0.587	0.045	0.141	
	11排他的な	0.100	0.559	0.035	0.018	
	58ねたましい	-0.183	0.542	0.243	0.140	
	64自分の事をわかってくれない	-0.201	0.535	-0.089	0.149	
	10 緒でないと不安	0.263	0.524	0.084	-0.280	
	43思い通りにならない	-0.071	0.522	-0.091	0.255	
	35依存した	0.239	0.513	0.149	-0.170	
因子Ⅲ mirror	85目標となるような	-0.015	-0.115	0.758	-0.023	
	21あこがれる	0.060	0.129	0.723	-0.026	
	41うらやましい	0.048	0.214	0.630	0.014	
	22同じようになりたい	0.038	0.350	0.584	-0.190	
	57切磋琢磨する	-0.015	-0.221	0.583	-0.009	
	33劣等感を感じる	-0.182	0.418	0.569	0.056	
	68世界が広がる	0.180	-0.210	0.540	0.338	
	8競い合う	-0.218	-0.038	0.537	-0.134	
因子Ⅳ differe	82それぞれに違った	0.072	0.038	0.004	0.657	
	62違いを感じる	0.000	0.132	0.057	0.648	
	81別々の	-0.026	0.158	-0.024	0.623	
	65異質な	-0.041	0.346	-0.048	0.615	
	70ずれを感じる	-0.069	0.395	-0.004	0.528	
	67新鮮な	0.154	-0.075	0.471	0.515	
	25（相手から）独立した	0.158	0.126	-0.193	0.506	
66意外性を感じる	-0.079	0.059	0.317	0.504		
説明分散		17.02	8.25	7.75	4.86	33.28
α係数		0.953	0.876	0.842	0.786	0.922

第1因子を「共感性」(例: 悲しんでいる人を見ても、あまりピンとこない事が多い/人の気持ちに敏感な方だ)、第2因子を「自己主張性」(例: 自分の意見ははっきりと主張するほうだ/納得できない事には妥協しない方だ)、第3因子を「分離性(-)」(例: 日常のささいな出来事や人間関係には、あまりわずらわされる事はない/人にどう思われるかという事はあまり気にならない)、第4因子を「他者欲求優先」(例: 周囲の人々の幸せが、私の幸せだ/人に尽くす事に喜びを感じる)とした。

(4) TAT反応の分類 各図版に分類基準を設け、対象者の反応を分類した(表2,3)。図版2では、手前の女性と背景との関係付け方に着目し、手前の女性一人を取り出して描くのか、複数の人物を関係付けて描くのか、複数の人物を羅列して描くのか等で分類した。図版9では、鈴木(1997)の分類表を参考に、女性二者間の関係付け方によって分類した。各図版において、人物間の関わらせ方をみる指標として「描写的である」、「状況の中に入って描く」を、人物に対する情緒的な関わりをみる指標として、「気持ちの言及あり」、「気持ちの言及なし」を設けた。設けた分類基準は、全反応を対象に、心理臨床学専攻の大学院生1名との一致率を求め、男女各々に95%以上の一致を見た上で採用した。図版9は、女性同士の関係なので、女性のみを分析対象とした。

2. 同性関係イメージ尺度に基づく、クラスター分析による類型化 男女学年別に、同性関係イメージ尺度の4つの下位因子を変量として、ウォード法によるクラスター分析を行い、各々4クラスターを得た。次に、同性関係イメージ尺度、自我同一性尺度、一体性分離性尺度それぞれの因子得点について、クラスターを独立変数とする1要因4水準の分散分析を行った(表4,5,図1,2)。そして同性関係イメージ尺度の因子得点値の高低の傾向に従って各群を命名した。また、クラスターごとに、TAT反応分類基準による反応数を χ^2 検定(及び残差分析)、又はFisherによる検定を行った。以下では男女別に各クラスターの考察を行う。

【男子】①男子クラスター1 chumship体験群(46名) 本群は、全学年でchumship因子得点が他群よりも高く、negative因子得点は低い傾向にあった。身近な同性との間で疎外感をあまり感じる事なく、chumshipを経験した群である。また、mirror因子得点が高く、身近な同性と同類性を感じ、自分と比較して見る傾向にあった。difference因子得点は特に中学では高い傾向にあった。自我同一性尺度因子得点では「独自性(-)」「安定性(-)」「自己受容性(-)」がクラスター3より低く($F[3, 175]=11.3, p<.001$, $F[3, 175]=5.03, p<.005$, $F[3, 175]=5.7, p<.001$)、自らに対する明確な感覚をもつ。一体性分離性尺度因子得点では、「自己主張性」がクラスター3より高く($F[3, 175]=8.02, p<.001$)、かつ「共感性」「他者欲求優先」がクラスター2,4より高い($F[3, 175]=8.02, p<.001$, $F[3, 175]=6.50, p<.001$)事から、他者との関係の中で自分を分離、主張すると共に、他者に合わせていく傾向も高い。これは、同性間で安定した関係性を経験した事と関連しているのではないかと考えられる。TAT反応は、図版2で、「II複数の人物の立場から描く/(1)人物間に関係付けあり/①人物間に関わりあり」が少なく($\chi^2(3)=17.76, p<.001$)、「II複数の人物の立場から描く(2)関係付けが羅列的」のうち、「設定を設けて描写」がクラスター3よりも多かった(Fisher $p<.005$)。この群は描写する描き方、設定を作った上で複数の人物を描く特徴があり、一線をおいたつながり方といえる。このようなあり方は、本群が同性との間で自他の違いを感じた上で連帯してきた群である事から、安定した同一性のありようではないかと考えられる。

表2 図版2 反応分類表

	男子クラスター					女子クラスター			
	1	2	3	4		1	2	3	4
	人数					人数			
	46	24	55	54		43	51	44	30
I 左の女性中心	23	12	27	21		33	38	29	19
(1) 女性一人をとりだす	2	4	4	4		5	5	2	5
(2) 女性のいる所と後は別	4	3	2	0		4	3	4	4
(3) 背景を見て思う	7	3	12	13		17	18	17	6
①周囲対自分	4	1	6	6		10(+)	5	5	1(-) *
②背後の人物の反応にも言及	3	2	3	2		2	6	5	1
③背景への関心	0	0	3	5		5	7	7	4
(4) 背後の世界との関わり	10	2	9	4		7	12	6	4
設定を設けて描写	9	0	1	1		3	7	4	2
状況に入っている	1	2	8	3		4	5	2	2
II 複数の立場から描く	20	12	26	30		10	13	14	10
(1) 人間に関係付けあり	10	8	19	14		3(-)	7	6	9(+)
①人間に関わりあり	1(-)	1	16(+)	7*		3	4	3	5
気持ちあり	1	0	1	2		3	3	3	4
設定を設けて描写	0	0	3	1					
状況に入っている	1	0	8	1					
気持ちなし	0	1	5	5		0	1	0	1
設定を設けて描写	0	1	3	2					
状況に入っている	0	0	2	3					
②それぞれ描く	9	7(+)	3(-)	7*		0	3	3	4
気持ちあり	6	1	2	6		0	3	3	3
設定を設けて描写	3	1	0	5					
状況に入っている	3	0	2	1					
気持ちなし	3	6	1	1	* 2>3,4	0	0	0	1
設定を設けて描写	3	6	1	1					
状況に入っている	0	0	0	0					
(2) 関係付けが羅列的	10	4	7	16		7	6	8	1
設定を設けて描写	8	4	1(-)	9(+)	*	3	2	4	0
気持ちなし	8	4	0	4	* 1,2>3	0	2	1	0
気持ちあり	0	0	1	5		3	0	3	0
状況に入った描き方	2	0	6	7		4	4	4	1
気持ちなし	0	0	4	1		1	2	4	1
気持ちあり	2	0	2	6		3	2	0	0
III その他	3	0	2	3		0	0	1	1
左の女性以外の1人立場	1	0	1	2		0	0	1	1
全体									
設定を設けて描写	14	12(+)	8(-)	18	*				
状況に入っている	6	0	18	12	*3>1,2				
気持ちあり	6(-)	1(-)	14	18(+)	*	13	14	18	10
気持ちなし	11	11(+)	10	11	*	4	11(+)	2(-)	5

*クラスター間で人数に偏りがあった項目

表 3 図版 9 分類表

	女子クラスター				
	1	2	3	4	
	人数				
	43	51	44	30	
I 両者の立場に明確な違いがあるもの	35	34	29	17	
i 両者の個人的関係の性質が明らかにされているもの	25	25	23	14	
1: 両者の間に、対立が顕在或いは潜在しているもの	21	24	17	8	
A: 両者が明白な競争・敵対関係にあるもの (ライバル同士など)	17	20	16	6	
a: 走る方の女性は悪い性格 (意地悪、自己中心的、嫉妬深いなど)	1	4	1	0	
b: 走る方の女性を陽の性格、木の側の女性を陰の性格とするもの	2	3	1	2	
c: 木の側の女性の方がライバル (敵対) 意識を強く燃やしているもの	14	13	14	4	
① 気もちをいだく	6	3	3	2	
② 攻撃心、攻撃	4	5	10(+)	1	*
d: 走る方の女性が木の側の女性に攻撃心	2	3	1	1	
e: 双方向	2	2	0	0	
B: 一時の喧嘩とみなされるもの	3	2	0	1	
C: その他 関心をもつ	1	2	1	1	
2. 木の側の女性は走る方の女性に対し監督者的・保護者(付人) 的であるもの	2	0	3	3	(*)
走る方の女性に物を届けようとしている	0	0	1	3	(*)
心配している	2	0	2	0	
3. その他	2	1	3	3	
右が左から逃げる	1	1	3	0	
2人が一つの状況にある	1	0	0	3	(*)
ii 両者の間に個人的関係はないか、あってもその性質は明らかでないもの	10	9	6	3	
II 両者の間に明確な違いがないもの	2(-)	1(+)	4	5	*
i 緊急事態に巻き込まれている・慌てて走っている	1	4	3	1	
ii 遊びにきている・遊び・戯れ	0	5	1	4	(*)
iii 2人が一つの状況にある 共謀・協力関係	1	2	0	0	
III I, II 以外の特殊なもの	6	6	11	8	
i 走る方の女性を心像・画像・鏡像とするもの	5	5	11	3	
左の女性が右の女性の統制下にある (設定がしっかりしている)	5	5	1	1	
左の女性が右の女性の統制下でない (他者性あり・不思議体験)	0	0	10	2	*3>1,2,4
ii 女性一人のみに言及	1	0	0	3	(*)
反応なし	0	1	0	2	

*クラスター間の人数に偏りがあった項目

②男子クラスター 2 negative・difference体験群 (24名) この群は、chumshipの経験はあまり強くなく、negative因子得点も比較的高かったことから、身近な同性との間で疎外感を感じてきたといえる。difference因子得点は高い傾向にあり、身近な同性は自分とは違うという認識が強い。ただ、高校時はchumship因子とmirror因子が高く、negative因子が低くなっており、共感的かつ鏡

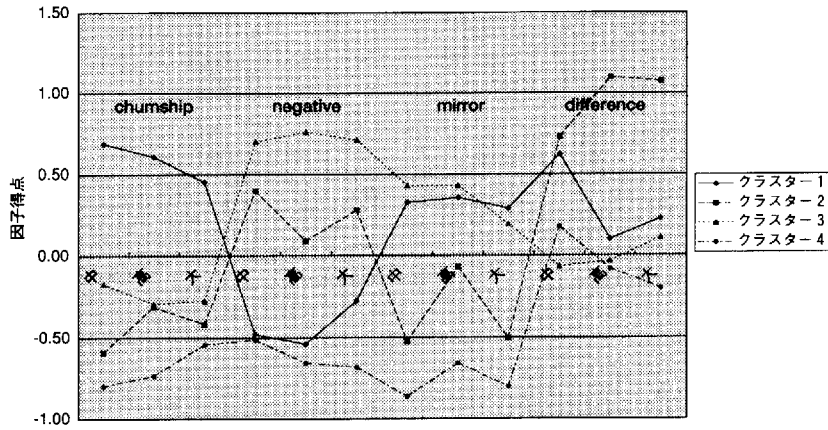


図1 男子クラスター別因子得点 (同性関係イメージ尺度)

表4 男子クラスター別因子得点 (同性関係イメージ尺度)

クラスター	chumship			negative			mirror			difference		
	中	高	大	中	高	大	中	高	大	中	高	大
1(N=48)	平均値 0.69 SD 0.65	平均値 0.61 SD 0.69	平均値 0.45 SD 0.72	平均値 -0.48 SD 0.58	平均値 -0.54 SD 0.59	平均値 -0.28 SD 0.77	平均値 0.32 SD 0.77	平均値 0.35 SD 0.92	平均値 0.29 SD 0.77	平均値 0.62 SD 0.86	平均値 0.10 SD 1.10	平均値 0.22 SD 1.07
2(N=24)	平均値 -0.59 SD 0.99	平均値 -0.31 SD 0.66	平均値 -0.42 SD 0.78	平均値 0.40 SD 0.83	平均値 0.09 SD 0.60	平均値 0.28 SD 0.52	平均値 -0.53 SD 0.75	平均値 -0.07 SD 1.02	平均値 -0.51 SD 0.81	平均値 0.73 SD 0.92	平均値 1.10 SD 1.07	平均値 1.07 SD 0.78
3(N=55)	平均値 -0.17 SD 0.81	平均値 -0.29 SD 0.87	平均値 -0.27 SD 0.88	平均値 0.70 SD 0.77	平均値 0.76 SD 0.68	平均値 0.71 SD 0.70	平均値 0.43 SD 0.77	平均値 0.43 SD 0.89	平均値 0.19 SD 0.73	平均値 -0.07 SD 0.73	平均値 -0.04 SD 0.70	平均値 0.11 SD 0.72
4(N=54)	平均値 -0.80 SD 0.68	平均値 -0.73 SD 0.85	平均値 -0.54 SD 0.91	平均値 -0.52 SD 0.73	平均値 -0.66 SD 0.77	平均値 -0.68 SD 0.75	平均値 -0.86 SD 0.75	平均値 -0.66 SD 0.80	平均値 -0.80 SD 0.92	平均値 0.19 SD 0.81	平均値 -0.08 SD 0.88	平均値 -0.20 SD 0.88
分散分析結果	F(3,175)= 33.71, p<.001	F(3,175)= 24.38, p<.001	F(3,175)= 12.94, p<.001	F(3,175)= 35.37, p<.001	F(3,175)= 48.44, p<.001	F(3,175)= 37.90, p<.001	F(3,175)= 34.33, p<.001	F(3,175)= 17.63, p<.001	F(3,175)= 20.65, p<.001	F(3,175)= 8.7, p<.001	F(3,175)= 10.40, p<.001	F(3,175)= 11.92, p<.001
多重比較結果	1>2,3,4 p<.001	1>2,3,4 p<.001	1>2,3,4 p<.001	2,3>1,4 p<.001	3>2>1,4 p<.001	2,3>1,4 p<.001	1,3>2,4 p<.001	1,2,3>4 p<.001	1,3>2,4 p<.001	1,2>3,4 p<.001	2>1,3,4 p<.001	2>1,3,4 p<.001

映的な関係性を体験した群である。自我同一性尺度因子得点は他群に比べて低くもなく、高くもなかった。一体性分離性尺度では「共感性」、「他者欲求優先」因子得点がクラスター1より低く、自分以外の他者の立場に自分を置きにくい傾向があり、これはchumshipの経験の希薄さと関係しているのではないかと推察される。TAT反応は、図版2で「II複数の人物の立場から描く/(1)人物間に関係付けがあり/(2)それぞれ描く」が多く($\chi^2(3) = 8.84, p < .001$)、中でも「気持ちなし/設定を設けて描写」が、クラスター3, 4より多かった(Fisher $p < .001$)。また、「II(2)関係付けが羅列的/設定を設けて描写/気持ちなし」がクラスター3より多かった(Fisher $p < .005$)。全体を通して「設定を設けて描写」が多く($\chi^2(3) = 11.25, p < .01$)、「気持ちあり」が少なく($\chi^2(3) = 11.1, p < .05$)、「気持ちなし」が多かった($\chi^2(3) = 7.68, p < .10$)。本群は、人物を直接的に関わらせるのではなく、それぞれに描いたり、羅列的に扱うものが多く、一定の距離をとって説明的に物語を作る傾向がある。また、気持ちの導入が乏しく、状況の中に入って描かない。情緒的に関わる事をせず、直接関係付けずに説明的に関わろうとする特徴があるといえるが、この群は身近な同性との間で特に違いを感じてきた群であることから、対象との距離を置いた関わりを示すのではなからうか。

②男子クラスター3 negative・mirror体験群 (55名) この群は、他群に比べてnegative因子得点, mirror因子得点は高く, difference因子得点は低い傾向にあった。身近な同性を自らの引き合いにして鏡映的に見る傾向があり、相手を同類性の感じられる存在と認識しているものの、

chumshipの経験をした傾向が強くなく、疎外感を感じてきたのではないか。自我同一性尺度因子得点では「独自性 (-)」「安定性 (-)」「自己受容性 (-)」がクラスター1より高かった。自らに対する不確かさの感覚が高い傾向にあり、自分に対する頼りなさがある。また、一体性分離性尺度では「自己主張性」因子得点がクラスター1より低く、他者との関係の中で自分を出していけなさがある。身近な同性との間で、鏡映的に見る希求性があったが疎外感を感じてきて、自らに対する不確実感を抱いているのではないか。TAT反応は、図版2で「Ⅱ複数の人物の立場から描く/ (1) 人物間に関係づけあり」のうち「①人物間に関わりあり」が多く ($\chi^2(3) = 17.76$ $p < .001$)、**「②それぞれ描く/気持ちなし/設定を設けて描写」**がクラスター2より少なかった (Fisher $p < .001$)。また、「Ⅱ (2) 関係づけが羅列的/設定を設けて描写/気持ちなし」がクラスター1, 2より少なかった (Fisher $p < .005$)。全体を通して「状況に入っている」が多く (Fisher $p < .005$)、**「設定を設けて描写」**が少なかった ($\chi^2(3) = 11.25$ $p < .01$)。本群は人物の直接的な関わらせが特徴であり、状況の中に入って描く傾向にある。人への希求性が窺われると共に、状況に直接的に関わる志向性があり、設定や枠付けをしない、状況への没入が特徴といえよう。身近な同性との間で、希求性があったにも関わらず疎外感を感じ、対自的な不確実感を抱いている、このような在り方から、対象に直接的に関わり、自らを一定の位置に定位させない状況没入的な傾向をもつのではないか。

④男子クラスター4 低得点群 (54名) 本群は、同性関係イメージ尺度の全下位因子得点が高群よりも低く、身近な同性との関わりの薄さがその特徴である。自我同一性尺度では「独自性 (-)」「安定性 (-)」因子得点がクラスター3より低く、自分に対する不確実感、不安定感は低く、対自的感覚は持つ。一方、一体性分離性尺度では「共感性」「他者欲求優先」因子得点がクラスター1より低く、他者との関係の中で、自分を他者へ合わせていこうとする姿勢は弱い傾向にある。TAT反応は、図版2で「Ⅱ複数の人物の立場から描く/ (1) 人物間に関係づけあり/②それぞれ描く」のうち**「気持ちなし/設定を設けて描写」**がクラスター2より少なかった (Fisher $p < .001$)。また、「Ⅱ (2) 関係付けが羅列的/設定を設けて描写」が多く ($\chi^2(3) = 9.30$ $p < .05$)、全体を通して**「気持ちあり」**が多かった ($\chi^2(3) = 11.1$ $p < .05$)。本群は、人物同士を関わらせず、複数の人物を羅列して描く傾向がある。気持ちへの言及は多く、情緒的関わりの姿勢は見られるが、それらが断片的に、人物それぞれの立場においてなされる点が特徴である。人物間の関わらせの弱さがみられ、ここには本群の他者と関わらない事で自らの安定を保つあり方が示されているのではないか。同性関係イメージ尺度の因子得点の低さからも、身近な同性との交流の乏しさが推察され、対象との関わり方は断片的で、関わりのもちにくさがあると考えられる。

【女子】同性関係イメージ尺度：①女子クラスター1 negative高群 (43名) 本群は、chumship因子得点が高群よりも低かった。negative因子得点は高く、mirror因子得点は低い傾向にあった。本群は、他群に比べて身近な同性との間でchumshipの経験や鏡映体験を経験してこなかった傾向にあり、身近な同性との間で疎外感を感じてきた特徴をもつ。自我同一性尺度では「独自性 (-)」「安定性 (-)」「自己受容性 (-)」因子得点がクラスター2より高く [F (3, 164) = 7.22, $p < .001$, F (3, 164) = 7.96, $p < .001$, F (3, 164) = 4.10, $p < .01$]、**「目的志向性」**因子得点がクラスター2より低かった [F (3, 164) = 2.56, $p < .10$]。対自的感覚の不確かさ、不安定さを持つ。また、一体性分離性尺度では「共感性」「他者欲求優先」因子得点がクラスター4より低く [F (3, 164) = 6.10, $p < .001$, F (3, 164) = 5.33, $p < .005$]、他者の気持ちを汲み取り合わせていこうとする傾向は弱い。他者の側に身を置く事に困

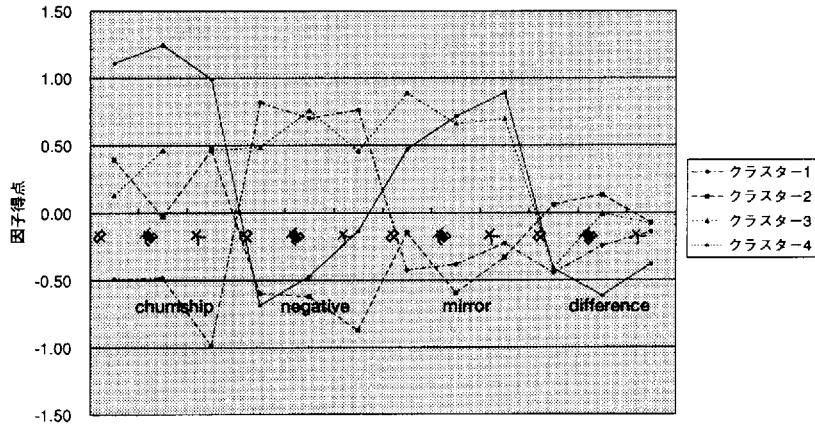


図2 女子クラスター別因子得点 (同性関係イメージ尺度)

表5 女子クラスター別因子得点 (同性関係イメージ尺度)

クラスター	chumship			negative			mirror			difference		
	中	高	大	中	高	大	中	高	大	中	高	大
1(N=43)	平均値 -0.49	-0.49	-0.99	0.81	0.70	0.76	-0.43	-0.39	-0.14	-0.45	-0.25	-0.23
	SD	0.96	0.91	0.88	1.00	1.00	0.97	0.85	0.77	1.14	1.05	0.87
2(N=51)	平均値	0.39	0.03	0.46	-0.60	-0.63	-0.87	-0.15	-0.60	0.06	0.06	0.13
	SD	0.84	0.99	0.81	0.83	0.79	0.68	0.70	0.86	1.01	1.04	1.11
3(N=44)	平均値	0.13	0.46	0.46	0.48	0.75	0.45	0.89	0.66	-0.08	-0.41	-0.01
	SD	0.77	0.69	0.68	0.84	0.78	0.82	1.09	0.85	0.84	0.97	0.81
4(N=30)	平均値	1.11	1.24	0.99	-0.69	-0.48	-0.14	0.47	0.71	-0.38	-0.42	-0.62
	SD	0.64	0.62	0.58	0.59	0.65	0.98	0.73	0.69	0.88	0.83	0.85
分散分析結果	F(3,164)= 29.33 p<.001	F(3,164)= 27.76 p<.001	F(3,164)= 49.14 p<.001	F(3,164)= 33.38 p<.001	F(3,164)= 34.73 p<.001	F(3,164)= 33.45 p<.001	F(3,164)= 20.79 p<.001	F(3,164)= 30.33 p<.001	F(3,164)= 21.27 p<.001	F(3,164)= 2.86 p<.05	F(3,164)= 4.54 p<.005	n.s.
多重比較結果	1<2,3<4 p<.01	1<2<3<4 p<.05	1<2,3<4 p<.01	2,4<1,3 p<.001	2,4<1,3 p<.001	2<4<1,3 p<.006	1,2<3,4 p<.01	1,2<3,4 p<.001	1<3,4 2<4 p<.001	n.s.	4<2,3 p<.05	

難さを示すと共に、対自的にも不確実感を感じている事が示されたが、これは身近な同性との間で疎外感を感じてきたと同時に、双方向性のある関係を体験していない事と関連しているのではないか。TAT反応は、図版2で「I左の女性中心/(3)背景を見て思う/①周囲対自分」が多く($\chi^2(3) = 7.24 p < .10$)、「II複数の人物の立場から描く/(1)人物間に関係付けあり/①人物間に関わりあり」が少なかった($\chi^2(3) = 7.64 p < .10$)。女性一人を取り出し、背景を対象化して女性の思いを中心に述べる傾向がある。図版9では「II両者の間に明確な違いがない」が少なく($\chi^2(3) = 6.87 p < .10$)、図版の女性二人を違いを持ったものとして扱う傾向にある。この群は、一人に重点を置き、後は退かせる描き方が特徴で、一方向的で主観的なあり方でないかと考えられる。

②女子クラスター2 difference体験群 (51名) 本群は他群に比べ、身近な同性との間で中程度の連帯をもってきている。negative因子得点, mirror因子得点は低い傾向にあり, difference因子得点は高校時にクラスター4より高かった。本群は、身近な同性同年輩との間での鏡映体験はあまりせず、疎外感もあまり感じてきていない。特に高校では自他の違いを感じる傾向にあり、一定の距離をおいた関わりを持ってきている。自我同一性尺度では「独自性(-)」「安定性(-)」「自己受容性(-)」因子得点が他群より低く、「目的志向性」因子得点がクラスター1より高く、自らに対する不安定感、不確実感は低く対自的感覚はもつ。一体性分離性尺度では「他者欲求優先」因子得点がクラスター4より低く、対人関係の中で、他者を優先させる姿勢が弱い。本群は、

身近な同性への希求性が強くない分、疎外感を感じる程度も低く、自分と相手は別々である、という違いの認識が対自的感覚の明確さ、他者優先的な姿勢の弱さと関連しているのではないかと考えられる。TAT反応は、図版2で「気持ちなし」が多く ($\chi^2(3) = 6.92 p < .10$)、情緒的関わりをしない傾向にある。図版9では、「Ⅱ両者の間に明確な違いがないもの」が多く ($\chi^2(3) = 6.87 p < .10$)、2人の女性に違いを持たせない、競合関係を見たりせず、両者に関係付けをしない淡泊さがあるといえる。図版に対して情緒的な関わりをせず、淡泊な関わり方をする本群のあり方は、身近な同性との間で上のような距離感を伴ってきた事と関連しているのではないかと考えられる。

③女子クラスター3 高得点群 (44名) 本群は、全ての因子得点が他群と比べて高い、もしくは中程度であり、身近な同性との間でchumshipを経験している一方、疎外感も感じている。同性に対して同類性を感じ、自らの引き合いにする鏡映体験もしているが、一方自他の違いも感じており、同類性と異質性の両方を感じている。相手に自分を映してみるが、一方で自他の違いを認識し、疎外感を感じてきたのではないかと考えられる。身近な同性への希求性はあるが、疎外感も感じてきており、身近な同性への感情が両面的といえる。自我同一性尺度では「独自性 (-)」「自己受容性 (-)」因子得点がクラスター2より高く、対自的感覚が不確実であり、一体性分離性尺度では「共感性」因子得点がクラスター4より低く、他者の立場に身をおけなさをもつ。この傾向は、本群が身近な同性との間で両面的な関係イメージを持っている事と関連しているのではないかと考えられる。TAT反応は、図版2で全体を通して「気持ちなし」が少なく ($\chi^2(3) = 6.92 p < .10$)、人物の情緒面への言及をする傾向にある。図版9では「木の側の女性が、走る女性へ攻撃、攻撃心」が多く ($\chi^2(3) = 7.51 p < .10$)、木の側の人物が走る側の女性に攻撃的な感情を向ける設定にする傾向にあり、一方の他方に対する強い感情表出が特徴的である。また、「Ⅲ i 走る方の女性を心像、画像、鏡像とする/左の女性が右の女性の統制下でない (他者性あり・不思議体験)」が多く (Fisher $p < .01$)、左の女性を右の女性の分身のような存在と設定し、その分身的存在に他者性を見ている。本群は、人物への情緒的関わりが特徴であり、人物間において一方が他方にとって激しい感情表出対象となったり、他者性を持った統御しにくい存在として立ち現れており、人物主体間の攻防が窺われ不安定さがみられる。対自的にも対他的にも不安定さを示し、このようなあり方は、本群が身近な同性との間で両面的感情を抱き、安定しない関係を経験している事と関連しているのではないかと考えられる。

④女子クラスター4 chumship体験優位群 (30名) この群は、全時期でchumship因子得点が他群より高かった。negative因子得点は低く、mirror因子得点は高い傾向にあり、difference因子得点は高校時に低い傾向にあった。本群は、身近な同性と連帯感を持つと同時に、相手を鏡映的な存在として感じてきたと考えられ、同性間での心理的距離の近さ、同一化の強さが窺われる。身近な同性との間での疎外感や、自他の違いはあまり感じず、一体感を伴った関係の中に自らを位置付けてきた群といえよう。自我同一性尺度では「安定性 (-)」因子得点がクラスター2より高く、対自的な安定性のなさがある。一体性分離性尺度では「共感性」「他者欲求優先」因子得点が他群より高く、他者への共感的態度や、他者を優先しようとする傾向が高い。TAT反応は、図版2で「Ⅰ左の女性中心/(3)背景を見て思う/①周囲対自分」が少なく ($\chi^2(3) = 7.24 p < .10$)、「Ⅱ複数の人物の立場から描く/(1)人物間に関係付けあり」が多かった ($\chi^2(3) = 7.64 p < .10$)。左の女性を一人だけ取り出して述べるより、複数の人物の立場に身を置き人物同士を関わらせて描

く特徴がある。図版9では、下位検定に有意差がなかったが、本群に最も出現率の高かったものは、「I i 2木の側の女性が物を届けようとしている」、「I i 3二人がひとつの状況にある」、「II両者に明確な違いがない/ii遊びにきている」であった。これらを本群の特徴として考察すると、人物間に協力関係、関わり合う設定を行う等、二人の間に葛藤を描かないといえる。9図版が女性同士の競争、敵対心が生じ得る図版である（安香・藤田、1997）にも関わらず、女性の協力関係や肯定的な関係を見る所から、女性同士の葛藤を表面化させない傾向にあるといえ、これは本群が身近な同性と距離の近い関係をもち、疎外感や違いを感じる傾向が低かった事と関連していると考えられる。

【総合考察】 まず、chumshipを経験した群の特徴をみる。男女に共通して、chumshipの経験が優位な群は、身近な同性に対して連帯感を感じたと同時に鏡映の関係イメージを持ち、共感性や他者優先的傾向が高かった（男子クラスター1、女子クラスター4）。chumshipを体験した事により、相手の立場に自分をおけるあり方につながっていると考え事ができるのではなかろうか。一方、chumshipを経験した群の特徴には男女で異なる点があった。男子は身近な同性との間で自他の違いを感じて連帯しているのに対し、女子は違いを感じる傾向が低く、同性間の距離の近さが窺われた。男子は対自的感覚の明確さがあり、他者との間で自分も出し、相手の側にも身を置く同一性のあり方がみられたが、女子は人物を関係付け、他者優先的なあり方をもつ傾向のみが高く、対自的感覚の安定性は低い傾向がみられた。一方、女子で対自的感覚の高かったクラスター2では、身近な同性との間で自他の違いを感じて距離を保ってきた傾向にあった。また、男子のクラスター2では、chumship体験をした傾向が高くなかったが、自他の違いを感じる傾向にあり、対自的感覚は得ていた。これらより、対自的感覚の獲得には、身近な同性との間での、違いの認識が関連するのではないかと考えられる。男子のchumship体験群では、自他の違いを感じた上で連帯しているため対自的感覚の明確さがみられたが、女子のchumship体験優位群では違いを感じる傾向が低いため、対自的感覚の明確さがみられず安定性が低かったと考えられる。これより、同性同士の連帯関係は、男女において異なることが窺える。すなわち、男子は自他の違いを感じた上で連帯しているのに対し、女子は自他の違いを感じずに同類性を感じている。自他の違いを感じない関係においては対自的感覚の明確さにはつながりにくく、些細なことでもゆり動かされる対自的な安定性の低さが生じるのではなかろうか。「女子は、男子よりも身近な同性に同一化する傾向が強い」（Deutsch, 1944）事から、女子にとっては身近な同性が自己性を帯びた存在として感じられやすく、同性との間で互いの差異を認め、対自的感覚を得る事が課題といえるのではないか。

次に、chumshipの経験をした傾向が弱かった群についてみる。男女ともnegative因子得点が高かった群は、対自的感覚の明確さが低い傾向にあり、同性間での疎外感を感じる事が、対自的感覚の得られなさに関連する事が示唆された。特に、鏡映体験をしながらも疎外感を感じている群（男子クラスター3、女子クラスター3）は、身近な同性への希求性はあるもののみたされず、対自的不安定さにつながっているのではないか。また、男女ともnegative因子得点が高かった群では、他者に対する共感性や、他者に合わせていこうとする姿勢も弱かった。同性間での疎外感を伴う体験は、他者優先的な態度の持ちにくさと関連すると言えるだろう。

以下、男女ごとにみる。男子は、身近な同性との間で疎外感を感じつつも、自他の違いを感じ

対自的感覚は得ている群（クラスター2）では、他者優先的な姿勢が弱く、TATでは情緒的関わりに乏しく対象との間に枠組みを作り一線をおいて関わるあり方を示した。また、身近な同性を鏡映的に見て同類性を感じているものの、chumshipの経験が高くなく疎外感を感じ、対自的不確実感が高く対人関係の中で自分を出していけなさがある群（クラスター3）は、TATでは自らを一定の位置に定位させず、人物同士の関係付けに終始し、状況に直接的に関わろうとする、状況没入的なあり方を示した。また、身近な同性との関わりが薄さが特徴で、対自的感覚は持つものの、他者優先的な姿勢は弱い群（クラスター4）は、TATでは人物間の関わらせの弱さ、対象と断片的な箇所において関わるあり方が見られた。クラスター2,4においては、対象との距離を保つことで対自的感覚が保たれていると考えられるものの、共感性や他者優先的態度が低く、対人関係的な関わりが弱さが見られる。一方、対象との関わりを示したクラスター3では、関わり方が過度に直接的で、不安定な同一性がみられた。各群、距離を取るか没入するかといった、対象との距離のとり方に極端さがみられ、状況への関わりにくさを示しているといえる。これに対し、chumship体験群（クラスター1）ではほどよい距離を保って関わる関わり方のあり方が見られた。男子にとって、身近な同性同年輩との連帯は、一線を置いた上での安定した関わり方の姿勢を持つ事と関連し、そのような同性同士の連帯関係が、Sullivanの示したchumshipではないかと考えられる。

一方、chumshipの体験をした傾向が低かった女子群についてみる。同性間で疎外感を感じ、対自的感覚の不安定さをもつ群（クラスター1）では、他者優先的な傾向が低く、TATでは対象に対する一方的なあり方がみられた。中程度にchumshipを経験した群（クラスター2）は、同性間で自他の違いを感じて対自的感覚の安定を得ているが、他者優先的な傾向が低く、TATでは情緒的な関わりをしない、淡白な関わり方がみられた。一方、同性への希求性もあるが疎外感も感じ、身近な同性への感情が両面的である群（クラスター3）は、TATでは情緒面の表出が高く、自らを一点に定位させない不安定なあり方がみられた。女子は各群、男子のように対象との極端な距離をとるあり方はみられなかったが、いかに対象との関係をもつか、いかに人物同士に関わらせるかに、同一性のあり方がみとれるといえる。女子のchumship体験群では、人物同士を双方向性のある関わりをさせるあり方や、同胞間の競争や葛藤は表面化させずに安定させるあり方がみられた。女子のchumship体験群における同一性の特徴は、男子のそれと異なり、人物関係を滞りなく落ち着かせ安定を保つという点にみられるのではないかと考えられる。女子の方が、関係志向的な同一性を示したと考えられる。Miller, J.B. (1976) によると、女性の自己感覚は、「親しむこと」や「関係性」の世界を作り出し維持することを通して固められていき、「関係自己」が女性の人格発達の中心をなしていくとされる。本研究の結果には、Millerの指摘するような女性の特徴がみられたとも言え、同性同年輩との連帯と同一性のあり方との関連は、男女でその質的な違いがある可能性が示唆された。

以上、男女様々に同性同年輩関係を結んできた群の特徴をみてきた。chumshipの体験が優位な群、そうでない群に男女で質的な違いが見られ、ここでも同性同士の関係性は性差が顕著である事が示唆された。男女共、身近な同性との間で同類性を感じ、連帯する事と、それぞれに違った存在と認識する事が、安定した同一性につながるのではないかと考えられる。今後は時期別の検討、およびより細やかな質的検討を行う事が課題である。

引用文献

- 安香宏 藤田宗和編 1997 TAT解釈の実際 新曜社.
- Blos Peter *On Adolescence* 1962 The Free Press of Glencoe, Inc (青年期の精神医学 野沢栄司訳 1971誠信書房).
- Deutsch, H. 1944 懸田克躬 埜英夫 1963 若い女性の心理 1 日本教文社.
- Dignan, M.H. 1965 Ego Identity and Maternal Identification. *Journal of Personality and Social Psychology*, 1 (5), 476-483.
- Erikson, E.H. 1959 *Identity and the life cycle* (自我同一性 小此木啓吾訳 1973 誠信書房).
- Lacan, J 1949 Le stade du miroir comme formateur de la fonction du Je, telle qu'elle nous est révélée dans l'expérience psychanalytique" *Écrits*, Édition le Seuil, Paris (<わたし>の機能を形成するものとしての鏡像段階 エクリ I 所収 宮本忠雄訳 1972 弘文堂).
- Marcia, J.E. 1994 The empirical study of ego identity. *Identity and development: An interdisciplinary approach* (pp67-80). Thousand Oaks CA : Sage.
- Miller, J.B. 1976 *Toward a New Psychology of Women*. Beacon Press. Boston.
- 須藤春佳 2003 前青年期のchumship体験—自己感覚との関係から 心理臨床学研究 20, 6, 546-556.
- Sullivan H.S. 1953 *Conceptions of modern psychiatry* W.W.Norton & Company Inc., New York (「精神医学は対人関係論である」 中井久夫他訳 1990 みすず書房).
- 鈴木睦夫 1997 TATの世界 誠信書房.
- 山本里花 1989 「自己」の二面性に関する一研究—青年期から成人期にかけての発達傾向と性差の検討— 教育心理学研究37, 302-311.

(日本学術振興会特別研究員・博士後期課程2回生, 臨床心理実践学講座)

(受稿2004年9月9日, 改稿2004年11月19日, 受理2004年11月30日)

On the relation between identity and close relationship of the same age and sex in adolescence

SUDO Haruka

As Sullivan(1953) showed the importance of chumship, a close relationship of the same age and sex is regarded as important for the formation of an identity during adolescence. This study attempts to investigate the relationship between an identity during adolescence and various feelings towards the close same age and sex. In this study, identity was measured as follows; whether one has the sense of oneself, how one sets oneself in the situation (including interpersonal situation). A questionnaire for this research was handed out to undergraduate and graduate students. "The image of the close relationship of the same age and sex", "ego-identity scale", "Connected-Separated Self Scale", and TAT were provided to the participants. From the results, various styles of identity were shown among similar cluster groups. Especially, the difference between the groups with chumship experience and without this experience was discussed. There were differences between the sexes in the results and there existed different problems in the formation of identity between the sexes.